

稲部遺跡(34次)

— 集落南端部の大溝 —

遺跡名：稲部(いなべ)遺跡

所在地：彦根市彦富町地先

時代：縄文～中世

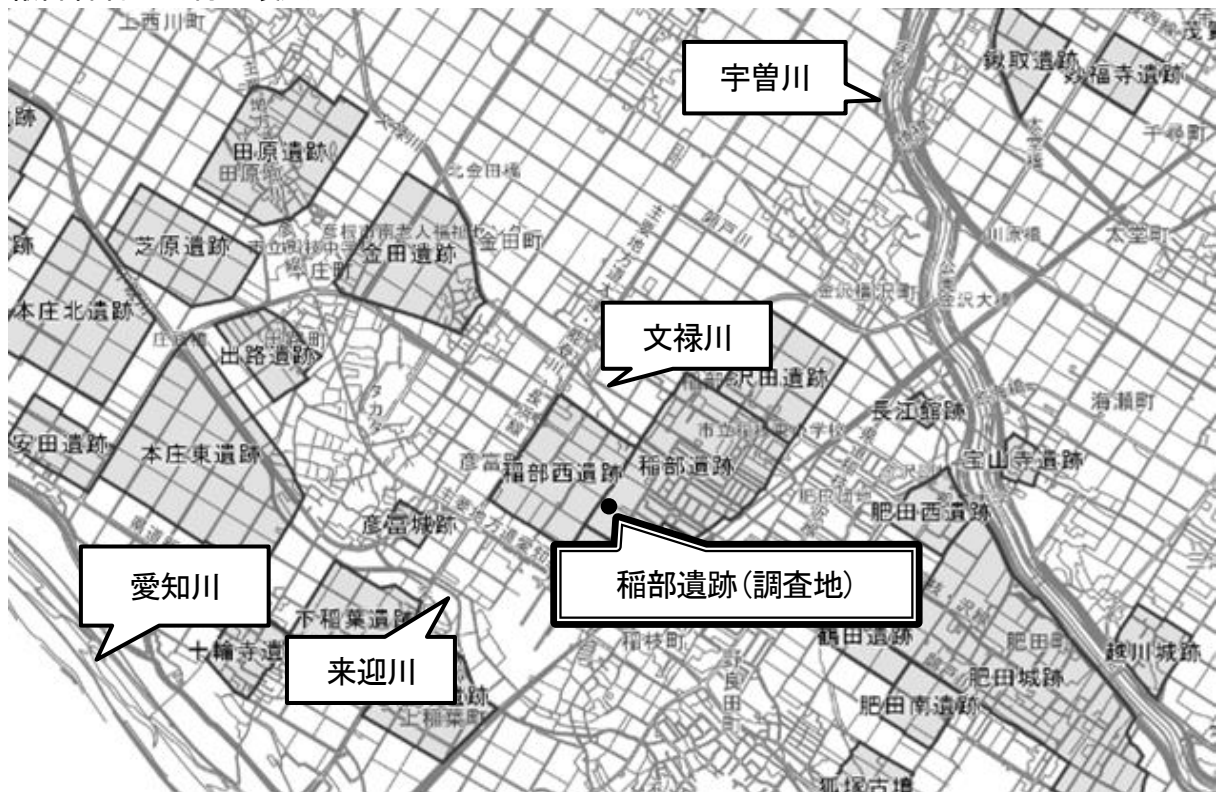
調査面積：1,300 m²

調査期間：令和4年5月6日～令和4年12月9日

調査原因：市道稲枝西口停車場線道路改良工事

調査機関：彦根市

報告者名：川村 峻太



彦根市稲部遺跡の位置 (S=1/25,000)

1. 調査の概要

近江湖東地域北部、彦根市稲部町・彦富町に所在する稲部遺跡は、JR 稲枝駅西側の旧愛知川である文禄川と来迎川との微高地上に立地します。稲部遺跡ではこれまでに 30 次以上の調査が実施され、主に弥生時代終末から古墳時代初頭(庄内式期から布留式期初頭)の竪穴建物、掘立柱建物、周溝付建物、大溝、方形区画溝、柱列、井戸などが確認されています。遺跡の広がりには東西約 500m、南北約 200m 以上と推定され、文禄川流域における弥生・古墳時代移行期にあたる 3 世紀の大規模かつ拠点的な集落遺跡であることが明らかになりつつあります。

昨年度、市道改良工事に先立って、今回の調査区の東側に位置する稲部遺跡 28 次調査を行いました。調査の結果、上層に平安時代後期から近世にかけての耕作に関わる、条里方

向と並行して掘られた溝と中世から近世の可能性のあるピットが確認されました。また、下層には、弥生時代後期後半から終末期(庄内式期)の溝が4条とピットが複数確認されました。

本調査は、28次調査の西隣に位置し、市道予定地が接続する部分の続きになります。本調査では、28次調査で確認された中世から近世にかけての耕作溝が調査区全体で検出され、下層から28次調査で確認された、弥生時代後期後半から終末期の溝の続きが確認された。また、同時代の溝3条と調査区西端で大溝を確認した。西端で確認された大溝は、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落の南端に関わる大溝であると考えられ、稲部遺跡群の集落の範囲を考えるうえで、重要な調査成果と考えられます。

2. 遺構

(1) 中世～近世

本調査区の上層では、中世から近世にかけての条里方向に掘削された耕作に関わる溝を確認しました。この溝は、切り合いの関係から、大きく3時期に区分することができます。最も新しい溝が、調査区北端及び南端に位置し東西方向に掘削された溝になります。次に新しい溝は、南北方向に掘削された溝で、他の東西方向に掘削された溝に関しては、これらの溝よりは古いが、詳細な時期はわかりません。

(2) 弥生時代終末～古墳時代初頭(庄内式期～布留式期初頭)

①溝 SD01～SD06

本調査区の東端部分で確認されました。溝の切り合いから、時期差がみられるものの、近い時期に掘削し、埋没したものと考えられます。堆積層は、細粒砂であるため、水流があったものと思われます。これらの溝は、南側の谷部への排水などを目的として掘削された溝であると考えられます。

②大溝 SD07

本調査区の西端部分で、北西－南北方向に伸びる大溝を確認しました。残存幅 10.8m、残存深さ 1.22m を測り、断面が逆台形状になっていることや、最下層から円礫や中砂礫が確認されていないことから、自然流路ではなく人工的に掘削された大溝であると考えられます。堆積の仕方は、周辺から流れ込んだ土壌によって堆積した粘土層と水流によって堆積した砂層が交互に堆積しています。再掘削が行われた痕跡は見られないことや、ブロック土が確認できないことから、流水によって、徐々に浅くなりながら埋没していったと考えられます。

この大溝の時期は、上層から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての土器が確認できるため、この時期までは機能していたものと考えられます。

この大溝は、近くに住居跡が確認できないことや、南部に深い谷が確認できることから、集落域の南縁端部に位置するものと考えています。しかし、環濠のように巡っていたわけではなく、自然流路からの幹線水路の可能性が考えられ、導水や排水の機能を持った大溝であると考えています。

(3) 縄文時代後期～晩期

サブトレンチの調査時に、縄文時代後期～晩期と推定される暗灰色粘土を埋土としたピ

ットを土層断面で確認したため、サブトレンチ付近の 50 m²を下層確認しました。下層からは、複数の杭跡と柱列を 2 条確認しました。

3. 遺物

出土遺物は、縄文土器、古式土師器、須恵器、灰釉陶器、中世土師器、石器、木製品等、植物種子類などが確認できました。

出土した古式土師器のほとんどは、大溝 SD07 に伴う土器で、大溝の上層で出土しました。古式土師器の中には、口縁が残存する、若狭や越前あたりのものとみられる外来系の無頸壺か鉢、在地の上げ底が残存する壺か甕を確認できます。これらは弥生時代終末(庄内式期)のものと考えられます。

また、大溝 SD07 から 50 点以上の材と 40 点以上の植物種子が出土しました。材と植物種子の多くは、中層と下層から出土し、加工屑や切断された材が含まれます。そのため、大溝 SD07 の周辺で材の加工が行われていたとみられます。他にも、木製品は 3 点出土しました。うち 1 点は、わずかに反りがある棒状の木製品と考えられます。表面には黒色の膜が付着しており、その性格について今後検討していく予定です。

写真・図等



写真 1 調査区全景 東から

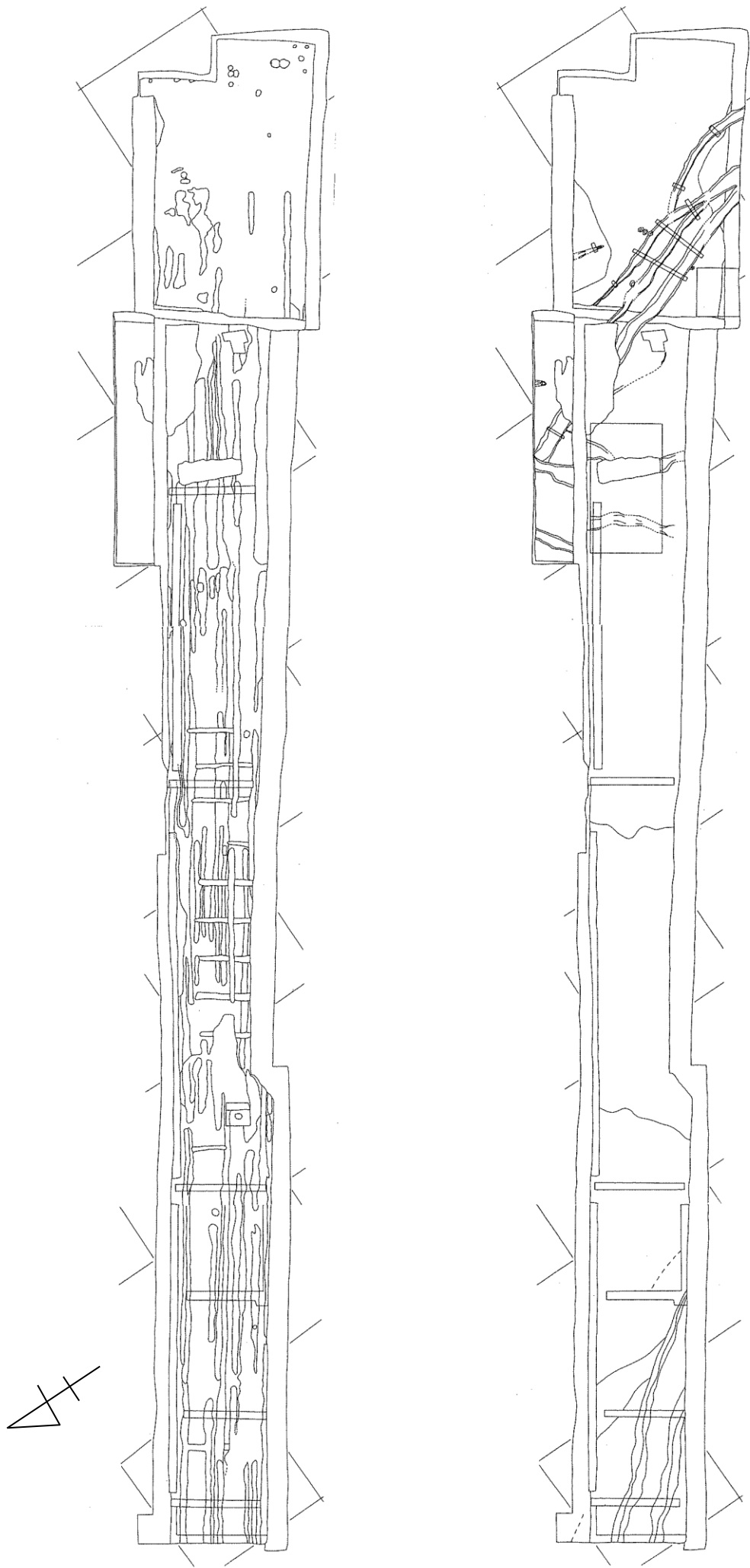


图1 稻部遺跡34次調査遺構平面図(上:上層 下:下層) S=1/400



写真2 中世から近世の条里方向の耕作溝



写真3 弥生時代終末の溝群 南西から



写真4 大溝 SD07 東から

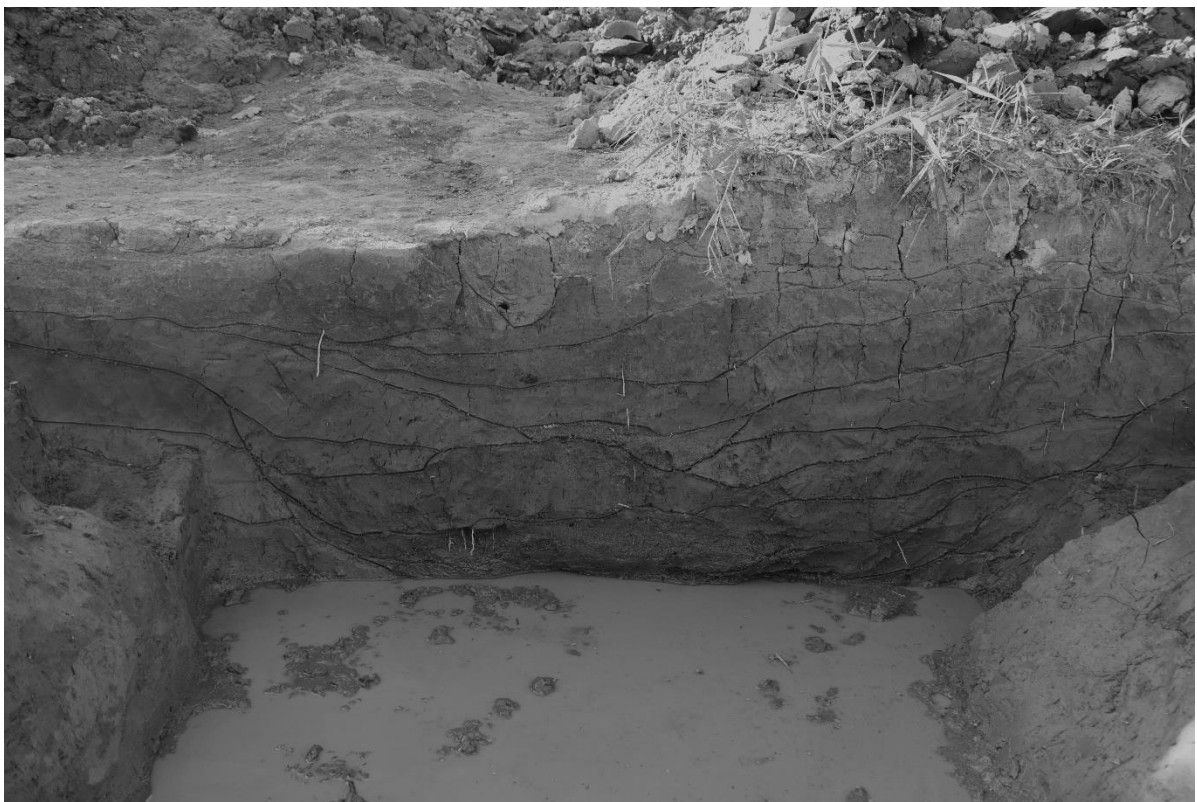


写真5 大溝 SD07 土層断面 東から



写真6 大溝 SD07 上層出土土器 出土状況



写真7 大溝 SD07 上層出土土器



写真8 大溝 SD07 出土木製品 出土状況



写真9 大溝 SD07 出土木製品